猫蓑通信

第103号
平成28年
（2016年）
4月30日発行
（年4回発行）

猫蓑会の連句と式目

青木秀樹

俳句や短歌などをなさっている方に連句をしませんかと声をかけると、たいていの方が、連句は式目があって難しいから、と言ってしり込みをされます。式目というのは連句をすることにそんなにネックになるものでしょうか。

どんなスポーツやゲームにも、最低限度のルールがあります。ルールがなければ試合をすることができません。最もルールが少ないと言われるサッカーでは「手を使わず、相手のゴールにボールを入れる」ことだけです。勿論相手の足を引っ掛けたり、後ろから突き飛ばしたりしたら、乱暴な行為として反則をとられます。

連句のルールは「歌仙は三十六歩也。一歩も後に帰る心なし」（『三冊子』しろさうし）のみです。式目というのは同じ事象の反復や渋滞を嫌うことから発生したもので、観音開きや三句がらみを避けるための方法です。常に変化を求めて付け進むところに、連句の難しさと面白さがあるのです。

同じ座の文芸である俳句と連句の違いをみてみると、俳句は自分ひとりで作句したうえで、句会や結社誌などの場を通じて鑑賞や批評をし合い、それによって師匠や仲間との間で共感、美意識、方法論などを共有していくものでしょう。それに対して連句は連衆が直接共同で一つの作品を作るので、あらかじめ句を作っておくことができません。前句をよく読んで付句を考えるという、その場での即興に命があります。

俳句を長年なさった方は、他の人と一緒に作品を作ったことがない、無季の句に違和感がある、短句をうまく詠めない、挨拶がうまくできないなど、連句の本質とは別のところで違和感を持ち、それを式目のせいにしているということはないでしょうか。連句をすると俳句が下手になるという言葉は、連句の本質を知らない人の言う言葉でしょう。

私たちには東明雅先生が連歌以来の式目、俳諧の式目、芭蕉の俳諧などを整理され「猫蓑会の式目の整理」としてまとめられたものがあります。明雅先生が実作を通して手直しされたものが、現在会員が共有しているものです。猫蓑会の式目を学び、それらの理由を理解することが、連句の基本を身につけることになります。

式目は自分が連句をする時に心がけること、式目について「聞かれないことは言わない」ことを明雅先生も式田和子先生も常に言っておられました。前提となる考え方を共有していない他流派の方に、結論としての式目だけ押し付けても反撥を招くだけでしょう。

猫蓑会の中に式目の制約の過剰解釈なども時折見受けられます。それが流布し「猫蓑会の人は式目にうるさい」といわれることを恐れます。識者と目される方でも流儀が違うと良し悪しの判断が異なるのはよくあることです。自己流の解釈を排するために話し合うことも重要です。

私たちは「猫蓑会の式目」を身に付けて、創意工夫をこらした連句をたのしみましょう。

●目次●

第百三十六回猫蓑会例会・初懐紙作品　歌仙八巻　2
真田幸弘公とタイガーマスク――平林香織　6
自他場の本質とは何か――生田目常義　9
鉋の跡――若林文伸　12
温故知新17：指導者の大切さ　14
事務局だより　16

第百三十六回例会初懐紙興行 一～四

福引の座

歌仙「酒家の灯」　坂本孝子　捌

酒家の灯に集ひて申す御慶かな　孝子
　正月小袖揺れる七彩　冬乃
薄氷長靴がばと踏み割りて　香織
　春飛魚の活き確かめて競る　美恵
朧夜のビルの屋上菜園に　吉文
　遠く聞こゆるふみきりの音　未悠
ウ 刀剣の鍔に施す金細工　健
　博物館に通ふ少女ら　織
触れたいと思ふほつぺににきび出る　恵
　何てつたつて俺は個性派　吉
ウォーターボーイ逞しくまた撓やかに　乃
　塩湖に沈むボリビアの月　悠
侵略の昔語りも冷じく　乃
　就職戦線走る爽秋　吉
乗継のホームでいぢるタブレット　織
　橋の雲水深々と礼　健
花片は戯れ舞ふよ錫杖に　恵
　ふるさと訛耳にのどけし　乃
ナオ 斑雪残る畑に鴉鳴き　悠
　消防団は今日も訓練　吉
トランプの占ひ香を燻らして　織
　もつれ始めた運命の糸　乃
きつかけは共に拾つた星の砂　健
熱き想ひをこめる島歌　乃
ジェラートもキスの長さに溶けてをり　恵
　時が深める還らざる愛　織
子猿の目円らで少し淋しげで　悠
　ヒエログリフに朱鷺トトの神　織
風紋の月崩してはまた一歩　健
　どびろくひそと懐にして　悠
ナウ 町工場裏に楽しき虫時雨　吉
　ノーベル賞はこの道の夢　仝
通りやんせ或る日マミーは逝きました　孝
　麻布十番人の賑はひ　健
塗箸につまむ好物花見重　孝
　ラヂオ寄席聞くうららかな午後　恵

連衆　百武冬乃　平林香織　山口美恵
　永田吉文　棚町未悠　由井　健

玉打の座

歌仙「写楽の鼻」　本屋良子　捌

浮世絵の写楽の鼻や初暦　良子
　たてたてちよんと筆始なり　葵
到来の京菜刻んで飯炊いて　豊美
　万歩計提げ雪解の道　秀夫
鳥雲に入り淡々と月残し　ふみ
　馴染の店の珈琲の味　曜子
ウ わが青春学生街の映画館　豊
　後姿で分かるマドンナ　葵
スマホから秘めたる想ひ流れ出し　夫
豊かな胸に小さき傷跡　み
鬼の子の揺れゐる木戸を潜りぬけ　仝
　優柔不断梨狩に来て　夫
月今宵稜線嶐々と妙義山　豊
　美酒に酔ひつつ舞へる仙人　葵
回転の床運動の技を褒め　曜
　黒き老猫尻尾ぴくりと　み
大輪の花火波間に砕け散り　葵
　たたみ忘れたビーチパラソル　夫
ナオ 千円の入山料で富士詣　曜
　B級食堂婆の手料理　仝
白みそと赤みそ文化比べあひ　葵
　応仁の乱今もわすれず　良
凍鶴の眼が見据ゑゐるこの魔界　豊
　年末賞与でるかでないか　葵
どぶ板を挟んで恋は燃え盛り　み
　あだびとの名は妻とおんなじ　葵
宣教師志願の上の辺境地　夫
　四輪駆動サバンナを行く　葵
月の客キリンにチータライオンも　夫
　放蕩息子戻りくる秋　曜
ナウ ふるさとの庭に口笛さやかなる　み
　夢のお告げで宝くじ買ふ　夫
動かない筈の石塊動き出し　良
　路傍の草はコンクリート割り　豊
花無尽賞罰なしの八十年　曜
　凧を自在に遊ばせる空　豊

連衆　石川　葵　高橋豊美　田中秀夫
　中村ふみ　前田曜子

初子の座

歌仙「夢いまだ」　鈴木美奈子　捌

夢いまだ青きに在りて初茜　美奈子
恵方の空の晴れわたりたる　路子
ローカル線畑鋤く人の影もなし　忠史
たらの芽採りのまなこ鋭き　有子
文を書く書斎を覗く朧月　弘子
床にゆつくり欠伸する猫　昭
ウ 船帰る大漁の旗翻し　史
軽くハグするやつちや場の隅　路
年の差をみんな心配するけれど　史
令嬢いまや肝つ玉母さん　弘
有明に博多山笠出陣す　有
気合を入れて呷る冷や酒　弘
牧水を慕ひ旅路に生きる兄　有
国境には歌碑の並びて　昭
欲しいのは天狗自慢の遠めがね　有
エンブレムでは模倣ばればれ　史
誰も彼も木戸銭いらず花相撲　昭
子らの踊りに大横綱も　路
ナオ 月を乗せ長江の風爽やかに　史
雁の列写すデジカメ　弘
七草に加えたきもの吾亦紅　路
今業平と評判の奴　有
醜聞を肥やしに昇るスターダム　弘
火の用心の声に恋する　史
雪女でもいい俺のとこへ来い　有
抱けば溶けるマシュマロの肌　路
こし方を綴れど尽きぬ懺悔録　弘
反省なれば猿に任せよ　有
小さく咲く小さき池にはひつじ草　昭
汗と涙の砂持ち帰る　路
ナウ 憧れのヒエログリフの跡を訪ふ　有
銃の規制は進まないまま　弘
PMが2・5なれど深呼吸　昭
車椅子にて越ゆる春泥　路
行乞の双手に受ける弥陀の花　奈
友の提げ来る大き蛤　史

連衆　倉本路子　根津忠史　佐々木有子
松原弘子　松原　昭

初曾我の座

歌仙「楪（ゆづりは）に」　島村暁巳　捌

楪に淡き陽当たるさ庭かな　暁巳
初鶯の声響き来る　文子
五色豆数たしかめて分かつらん　俊子
トランプ遊び家族揃つて　正夫
お砂場のシャベルバケツを照らす月　転石
ひよんの実吹いて見せる先生　碧
ウ 秋刀魚焼く煙気がねの独り者　俊
父に似てゐるところ好きです　文
町娘黄色い声でペンライト　石
自動運転御意は車に　俊
くたびれた大統領の吸ふ葉巻　石
聖書に誓ふ戦争のこと　碧
石油など掘ればいいのさ中東を　仝
らくだの背に仰ぐ凍月　正
撫でてみる金貨冷たし鬚の貌　石
ネットカフェには居続けの人　文
爛漫の花に宿るはあやかしか　仝
書を閉ぢてゆく春風の中　碧
ナオ 目借時大河望める楼に立ち　文
阿片の相場上々の由　石
活躍せし犬も老いては寝そべつて　文
自慢の種の古き賞状　俊
西日中野球部どつと銭湯へ　正
ペンキの富士に寄せる夏潮　碧
鳩の街けふの荷風はどこの店　石
下駄の鼻緒のゆるみ気になり　巳
身持よき女将昔の艶噺　石
よその子供にパパと呼ばるる　俊
月皓々この水酒にならざるや　碧
故郷の家青瓢揺れ　俊
ナウ 世に生きる煩悩数多地蔵盆　石
ゴミ分別に励む習慣　俊
沈ませぬ日本列島綱で引く　石
やまと心の残る村々　俊
花の滝落ちゆく淵に大魚棲む　巳
通奏低音山笑ふ頃　俊

連衆　橘　文子　三木俊子　國司正夫
林　転石　松本　碧

平成二十八年一月十六日
於　原宿南国酒家迎賓館

第百三十六回例会初懐紙興行 五～八

宝引の座

歌仙「猿猴月を取る」　生田目常義　捌

我もまた月取る猴や初日の出　常義
　力一杯漕ぐ宝船　了斎
紅顔のボーイソプラノ響きゐて　美代子
　机の上はいつも乱雑　ひろみ
納税期はやめはやめに済ませたり　久美子
　風やはらかに頁めくらる　霞
ウ 空海忌真言の文字動く如　斎
　心を穿つ君のひとこと　霞
右袂つまんでついてゆく径　斎
　常念岳の雪の眩しさ　霞
ＴＰＰコメの分野は上々に　久
　戦後史語る爺の漸寒　み
街の灯を懐かしみつつ十三夜　斎
　耳元かすかぷんと残る蚊　み
メタボリック症候群といはれもし　久
　まづは一献交はすぬる燗　代
根尾谷の花は見頃と旅心　久
　小さな傘が春雨の中　霞
ナオ 立ち話貸農園の耕しと　み
　ペットボトルのお茶は好まず　久
名画座の固きシートに身を沈め　霞
　橋は未来の渡り来る場所　斎
寝つかれず男を想ふ夏の夜　代
胸乳を濡らす汗か涙か　斎
浮世絵展ひとりで行きぬ上野まで　代
　私小説家はどこへ消えたか　み
パソコンもスマートホンも持たぬ奴　久
　触れてひんやり窓の鉄柵　斎
月の下ひとり校庭逆上がり　代
　村の外れを雁渡る頃　霞
ナウ 水匂ふ鮭は違へず遡り来て　み
　変身願望うつらうつらと　霞
アフリカの聞いたことない国の人　斎
　地球儀廻す孫の笑顔に　代
尺八の合奏満ちて花の宿　義
　温もりてゐる赤い毛氈　執筆

連衆　鈴木了斎　山田美代子　江津ひろみ　副島久美子　高塚　霞

宝船の座

歌仙「猫ちゃんによろしく」　中林あや　捌

猫ちゃんによろしくとある賀状かな　あや
　まづはなごやか籟初（ふきぞめ）の会　酔山
産業博巨大ロボット操作して　千惠子
　チュウインガムが覗くポケット　敦子
悪童に泣かされ帰る道の月　功
　みんなが曲る木犀の角　瞳
ウ 葡萄酒を醸せば過去の蘇り　千
　手が届きさう小さき幸福　や
完走しアルファベットでプロポーズ　瞳
宝石泥棒四人組とか　敦
浮いたまま五右衛門風呂の蓋揺れる　千
　サングラスでは読めぬ取説　山
月光のしたたる西瓜かぶりつき　瞳
　病院誤爆怒り満ちみち　功
老後にはスローライフの里求め　敦
　前評判のカフェの開店　仝
鳥籠の九官鳥に花ふぶく　千
　お伊勢参りは近鉄で行き　山
ナオ 永き日の古道具市飽きもせず　功
　ミニマリストは電子化のプロ　瞳
番付を配りたにまちご挨拶　山
　藍の手拭「鎌輪奴（かまわぬ）」の柄　千
ふぐ雑炊チョイワル男腕振ひ　功
　もう溶けちやうと雪女哭く　や
此処だけの話いつしか広まりて　千
　誰が儲けたいはくつき株　瞳
高崎山面倒見よい猿のボス　敦
　知の財産の零の発見　千
風を切り自転車飛ばし月を追ふ　山
　ビル街急にひんやりとして　功
ナウ 珍しい陶片ばかり美術展　敦
　校長先生髭をばつさり　山
念願の南米の旅実現し　仝
　五年日記も既に数冊　瞳
花守と耳傾ける花の声　や
　白く乾いた靴の春泥　敦

連衆　吉田酔山　鈴木千惠子　武井敦子　松本　功　北爪　瞳

平成二十八年一月十六日
於　原宿南国酒家迎賓館

鞠始の座

歌仙「曲独楽や」　松島アンズ　捌

曲独楽や地球はつかに傾ぎたる　アンズ
初東雲を仰ぐめでたさ　遊民
梅三分観光客は賑やかに　通斉
子持雀のちちと鳴く声　壽子
違ふ道歩いて帰る朧月　美友紀
仕込みに忙し豆腐売る店　秀樹
ウ　船旅のパンフレットを集めぬて　民
姉のかばんはいつも大きく　紀
夢ばかり描いて捨てて早や三十路　樹
君を待つてる甘い蜜の香　子
駅伝はあつといふ間に駆け抜ける　通
火垂るの墓の野坂蕘り　仝
七月の月の統べたるアンタレス　子
鋭く飛ばす卓のおはじき　民
珍しき中華料理の具材の名　ア
まだガラパゴス・ケータイを持ち　子
露座仏の御手に溢るる花の雨　通
弾跡ぬくし戊辰戦争　樹
ナオ　山笑ふ数多悔ある来し方を　民
酔つてははまる猿沢の池　樹
神主にまた悪戯を叱られる　子
三尺寝から醒めた八つあん　民
靴下の穴黒糸で繕ひて　紀
フォールインラブ氷上の美技　子
ノーメイク隠す駅裏風疼き　民
やつぱり男そばにいなけりや　樹
瓶のふた力まかせにこじ開ける　紀
縄で結びし結界の石　子
横笛の遠く流るる後の月　民
霧の水尾引き丸木舟出づ　通
ナウ　百獣の王孤高なるそぞろ寒　民
昔話に耳を澄ませば　子
見えずとも座敷童子は福を招び　通
風呂もご飯も準備万端　紀
花明り貴女の笑顔忘れない　ア
なるやうになる春の一日　樹

連衆　内田遊民　菅原通斉　杉山壽子
奥野美友紀　青木秀樹

笑初の座

歌仙「八咫烏」　近藤蕉肝　捌

八咫烏うた申しあぐる淑気かな　蕉肝
初東雲に染まる峰々　雅子
名講義階段教室満員に　淳子
めくり漫画で猿を踊らせ　徹心
盃に月の滴のしたたらむ　一枝
色なき風をはらむ帆の露　佐紀子
ウ　秋袷弁慶縞の似合ふ頃　淳
戯作者囲ふどぶ板の奥　枝
うつつでの恋はそれほど艶めかず　雅
けふのおかずは昆布の炊いたん　枝
マイナンバー来たが暫くしまつとき　雅
円周率がすらすらと出る　心
めまとひを払ひて昇る野辺の月　淳
釣果の鮎は魚籠にいつぱい　肝
TPP過大評価と自画自賛　枝
バイクの鬼がするりすり抜け　心
花の宴みんな輪になり首陀羅節　淳
深泥池に蝌蚪の生るる　心
ナオ　相部屋は日本菫の研究家　淳
五十三次徒歩で行く夢　雅
コーヒーをコンビニ毎に買ひ続け　紀
暮しをしるす貯金通帳　全
かじけ猫首をかしげて舌を出し　淳
ふるさとの道しのぶ冬晴れ　心
古本に残る栞に紅の跡　淳
まだ甘やかに駆け落ちの妻　雅
ラインには孫の写真の次々と　紀
ギネスをかけて交叉跳びする　雅
仰ぎ見る望月すかす水煙に　紀
菊人形の並ぶ長壁　淳
ナウ　住みなれて地芝居の役貰ひけり　全
大黒柱磨き減りして　雅
健康の秘訣はいつも笑ふこと　枝
この出囃子は小さん師匠ね　肝
剣法のみなもとの宮花吹雪　紀
玄海灘へシャボン玉飛ぶ

連衆　武井雅子　上月淳子　佐藤徹心
西田一枝　間佐紀子

真田幸弘公とタイガーマスク

平林香織

平成二六年九月二八日、長野市松代町長国寺で、真田家第六代藩主真田幸弘公（一七四〇～一八一五）の二百回忌追善供養が行われた。幸弘の家臣で俳人の立左（りうさ）（寺内多宮・一七九〇～一八六七）に与えた号「松濤軒」を継いでおられる小林静司氏（第五世松濤軒）と都心連句会の方々による追善正式俳諧興行も開催された。猫蓑会から参列なさった方も多い。追善法要では長国寺所蔵の幸弘公の肖像画が掛けられていた。微笑を湛えたやわらかな表情のものである。

よく知られているように、真田家は、第三代信之の時代に上田から松代に移封された。関ヶ原の合戦の折、父・昌幸と次男・信繁（幸村）が西軍に、長男・信之が東軍に分かれて戦ったことは、繰り返し川柳にも詠まれているし、今でも歴史小説の格好の題材である。

兄弟で身ごろを分ける真田縞（柳多留）

六文の兄弟忠と義に分かれ（同右）

このときの英断によって、真田家は十代に及んで松代領を治め続けることができた。信之は、九三歳の長命で、父の意を汲み松代領真田家統治の基礎をがっちりと固めた。その後短命の藩主が続くが、第六代幸弘は四六年の長きにわたって藩主の座にあった。江戸藩邸ではなく松代生まれ、国元の藩士や医師・茶頭らと親しく俳諧興行をしたり、江戸の俳諧師を松代に招いて月の宴を行って摺り物にしたり……。幸弘公の開かれた心とやわらかい感性が、長国寺伝来の柔和な幸弘像から伝わってくる。

さて、真田家史料の数々を保存・管理している松代町の真田宝物館には、タイガーマスクと呼ばれる幸弘公の肖像画が伝来する。箱には「幸弘御生年甲乙（えと）七ツ目虎之図」とある。

幸弘が藩主になった江戸中期、どの藩も財政難に苦しんでいた。松代藩も例外ではなかった。父の急逝により弱冠一三歳で家督を継いだ幸弘は、一八歳のとき下級藩士恩田木工守民親を勝手係に抜擢し改革を行う。改革の目玉は質素倹約と文化振興だった。随筆『日暮硯』によると、恩田は幸弘に文武両道に励むよう進言し、家中に対しても文武諸芸を稽古するように通達する。当時の「稽古」という考え方は「道」の意識に通じるもので、儒学をはじめとして、歌学・俳諧・茶道・音曲などあらゆる学問・芸術について朝から晩まで繰り返しさらって心身を鍛錬するというものだった。恩田は、神仏への信仰心を前提として、「楽しみはすべし。精は出すべし」と説いた。己を謙虚にして家業に精を出すならば、囲碁や将棋、双六、謡曲、俳諧、浄瑠璃、三味線、博奕でも、なんでも好きなことをするようにと、心の豊かさとゆとりを大切にする方針を貫いた。恩田はその後五年で病死してしまうが、領内は老いも若きも家業に精を出す一方で学問芸能に励み、盗みや博奕をするものはなくなったという。若き藩主に恩田の政治学はしっかりと伝わったことだろう。

幸弘公は存命当時から菊貫（きくつら）・象麿（きさまろ）の号で俳人大名として知られていた。ときには月に四、五回、百韻を巻いていた。それも点取俳諧である。連衆のほかに、少ないときは二、三人、多いときは百人の俳諧宗匠に点者として一句一句の採点を依頼し、天・地・人のランキングをし、帯

や煙草などの景品を出す。真田宝物館には数巻の百韻を清記した点取俳諧帳が一六九冊伝来する。同座した大名は七〇藩に及ぶ。

興行が終わると一巻を点帖に清記して点者全員に一冊ずつ送る。点者は採点し一番いいと思った高点句を抜書きしてきれいな点印を捺して送り返す。その結果をまとめたのが左図のような点取俳諧帳である。これは享和元年（一八〇一）正月に松代藩の下屋敷（南部坂）で行われた興行の名残の裏である。右側の帳票は「子鷹」「兌堂」「陸馬」と点者を紅白の文字で書き分けたもの、句の脇の数字は点者ごとの

採点である。この巻は評なしだが、五十評、百評などのときは、一巻を二回、三回清記して帳票を張り替える。

「フ」は執筆の略号で、月花の句は執筆が詠むことが多い。左に書かれているのは「句上げ」、それぞれの宗匠の点の集計結果である。「御」「公」は幸弘公のこと。参考までにこの百韻の第三までと挙句までの三句を翻字しておく。

家ちかく鳴立つ雉や朝のほど
　堰（ゐせき）の草に余る雪解
長閑なる空に遠路（とほみち）誘れて
　……
　貰ふた猫をやる先がなし
公に花をゆるしてみせる郷
　霞の奥に立続く家

さて話を虎之図に戻そう。この絵がいつ誰によって描かれたのかはわからない。当時、生年の干支から七つ目の干支の衣冠した絵を祀ると出世するという俗信があった（大田南畝『南畝莠言（いうげん）』）。幸弘は申年生まれだから七つ目の干支は寅である。出世祈願の絵だったと思われる。実際、幸弘は天明三年（一七八三）四四歳のときに官位を従五位下から従四位下に上げることに成功する。以後、外様でありながら、譜代扱いとなり、将軍家から重要な役を割り当てられるようになった。真田宝物館にはロビー活動に七千両（約七億円）を要したという記録が残る。天明の飢饉（天明二～八年）や浅間山の噴火（天明三年）で領内が荒廃しているさなかの出来事である。天明四年には、幸弘に男子が居なかったので井伊家から養子を迎えている。

天明元年幸弘は四二歳の大厄であった。後厄の天明二年は寅年である。正月は寅月でもある。タイガーマスク幸弘の絵はユーモアがあってほほえましいものだが、そこにはお家の繁栄を願う幸弘の切なる願いがこめられてもいる。酉年生まれの泉鏡花は、亡母に「逆さ干支」として水晶でできた兎をお守りとして貰ってから生涯にわたり兎の置物を収集していた。やはり酉年生まれの辻村ジュサブローは、母が遠足のときなどお守りとして下着に兎の刺繍をしてくれたという。兎の表象は母の形代に似つかわしい。

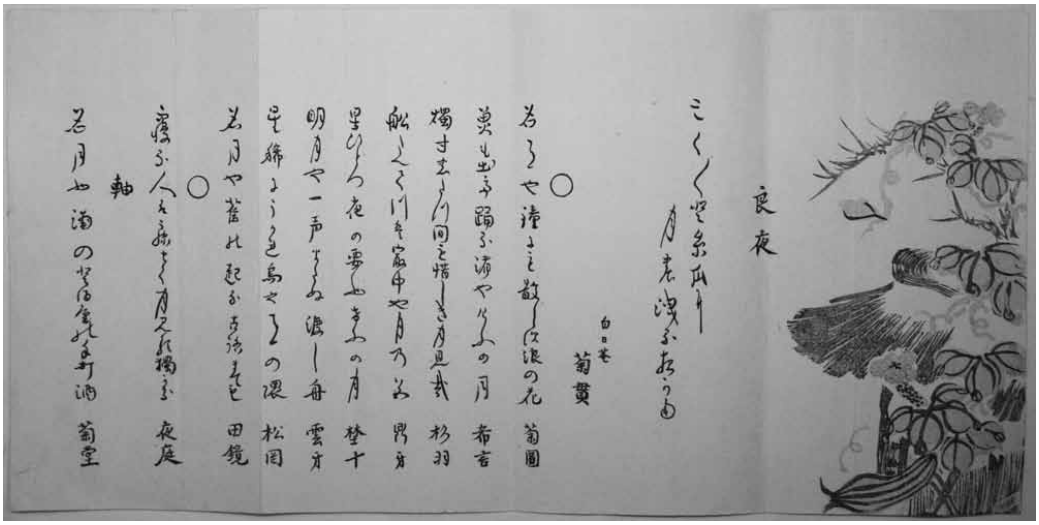
多くの大名・藩士・庶民らと点取俳諧に興じた幸弘の交遊圏は広い。郡山藩の柳沢信鴻（のぶとき）（俳号米翁）の俳諧サロンに出入りしかわいがられた。幸弘は安永元年（一七七二）一〇月に参勤交代で松代へ下るが、そのとき『更級紀行』で名高い姥捨山で月見を行うために米翁を通じて知り合った俳諧師菊堂を松代に伴っている。米翁の『宴遊日記』には、そのことを羨んで詠んだ餞別の句が掲載されている。

武蔵野と姥捨山や片見月

真田宝物館には菊堂が一座した俳諧一枚摺が伝来する。「安永天明之頃／御歌摺物」と墨書された紙筒に、七枚が納められる。それぞれの月は、安永三年良夜、安永八年湖上の月、天明

三年後月、天明三年半秋、天明八年後月、年次未詳良夜（左図）、年次未詳後月である。

「とくとくと糸瓜に月の洩る夜かな」という



菊貫（幸弘）の句のあと松代藩士の句が並び、軸句として菊堂の「名月や浦のとまやの手打酒」が載る。苫屋に糸瓜の花と実をあしらった二色刷りの絵が添えられている。江戸の俳諧宗匠を信州まで招待し、月の句会を開き、そのようすを摺り物にして配布する。藩主の下には何人もの側近がいて、それぞれにたくさんの係累がいる。藩主を頂点としたファミリー・ツリーのすそ野は広い。藩主の文化活動は人と物を大きく動かす。参勤交代によって江戸と地方の文化がつながる。とりわけ連衆が一堂に介する俳諧の座では、人と人がつながり、情報も行き来し、教養と感興が共有される。おのずから領内の民度は高まったことだろう。昭和の俳諧師・松濤軒三世清水瓢左はそんな風土に生まれ育った。

ところで寛政の改革を推し進めた松平定信は一八歳年少の甥（定信の養父松平定国が幸弘の正室の兄）である。幸弘は定信次男を自分の孫娘の婿として第八代藩主に迎えている。定信にならって五〇歳を過ぎてから堂上歌人日野資枝（すけき）に歌道入門を果した。女流歌人・遊歌（ゆうか）に添削を請い楽しげに歌の稽古に励んだようすも伝わる。

二〇代、三〇代の頃俳諧に夢中だった幸弘が、老中首座となったわが甥・松平定信の言動に注目するようになるのは四〇代の頃である。定信が白河藩主を致仕してからの日記『花月日記』には七〇代の幸弘がしばしば登場する。幸弘は杖をつきながらも足しげく定信の浴恩園を訪ねていたようだ。定信は「真田のおじ」は俳諧ばかりに熱心で風流心がない、と手厳しい。幸弘危篤の報を受けて急いで南部坂下屋敷を訪ねたようすも書かれる。熱であえぎながらも定信を歓待し酒など振舞おうとしている姿を哀れで悲しいと綴り、何かというと自分をあてにした伯父であったと振り返っている。「付かず離れず」の距離感による幸弘の人間関係指数は非常に高いものだったように思う。頼み上手で人懐こい伯父と、頼りがいも政治力もある甥の姿が目に浮かぶ。

真田宝物館には点取俳諧で高点を取った句を抜書きした高点句集や、幸弘が点を付けた興行の記録も伝来する。幸弘の四〇・五〇・六〇・七〇歳の賀や、そのほかのさまざまな祝賀の折に他家と和歌や発句をやり取りした短冊やそれをまとめた賀集もある。文人大名の名にふさわしい膨大な史料群である。武で名を馳せた真田が、幸弘の代に文の輝きを放った。恩田木工守の指導で幸弘が藩内に設けた学問稽古所は、領内の私塾につながり、やがて松代文武学校に発展し、山寺常山・佐久間象山らを輩出する。

王のシンボルともいうべき虎頭の衣冠図には、藩主としての遊び心と祈りがこめられている。兄弟を敵と味方に分けた昌幸の苦渋の選択とはまるで異なる。しかし、わたしたちの意表をつく真田スピリットとしてどこか通じ合うものがあるような気がして見飽きることがない。

〈参考〉菊貫発句

明和二年（一七六五）

鳳凰の産み落してや玉の春

安永七年（一七七八）
晩鐘の雲と見る迄花見かな
むら雨に家を離れぬ蚊遣り哉
『水かゝみ』天巻より

文化八年（一八一一）
秋今宵心に千賀の浦の月
文化九年（一八一二）
群集ふ駒の目赤し枯野原

『菊貫公句稿』より

【付記】画像はすべて長野市松代町真田宝物館所蔵史料のもので、版権は同館にある。画像掲載を御快諾くださった同館に深謝申し上げる。

自他場の本質とは何か

生田目常義

●「自他場」とはなんだろうか？

私たち猫蓑会員は、連句一座すると各自の記録には一句毎に自・他・自他半・場を注記し、これをもって転じの証としている。しかしそれだけで、つまり自他場を打越と変えることだけで転じは完璧なのであろうか？

答えはＮＯ、である。いくら自他場が打越と変えてあっても、同様関連の事象について述べてあれば、三句絡みとして転じていないということになる。このことで筆者は何度か苦い思いをしている。

では逆に自他場は「転じ」とは無関係なのであろうか？

いったい、自他場とは何なのか？

これを考えるために、まず連句における「付けと転じ」がどんな文芸行為であるかを考えておきたい。

●連句は付けと転じにより文脈を構成する文芸である

「付け」とは何か。

簡単に言えば、前句の叙述事象に対して関係性のある事象を次の句で述べることであり、この二つの事象を詠み継ぐことで、新しい事象（世界）を感得できるようにする作業である。これは二句により述べられた事象の関係性そのものを作り出すことである。この二句によって作られた新しい事象（世界）がありきたりの陳腐なもので、共感性にも乏しいときは、その付けは喜ばれない。

しかし、この二句により感得される新しい事象（関係性）が、新規性、発見性やそれらに基づく共感性、美意識に富む時は、「よい付け」として喜ばれ治定される。

「転じ」とは何か。

二つの句により生まれた付け、ではその次の三番目の句はどうなるのか。ここでは一番目の句とは全く異なる事象を述べて、前二句の事象（世界）を脱し、第二の句との間に第一の句と全く異なる新しい事象（世界）を生み出したときに、「転じ」が完成する。

これを繰り返すことにより、新規性、発見性や共感性、美意識に富む事象が次々に展開され、ひとつひとつの事象だけでなく、さらにその変化を楽しむことができる。それぞれに感興を生む事象が次々に登場することは、自己の世界の拡張を感知させる。これを喜びとしない人はまずいないであろう。

連歌の世界で転じが必要とされたのは、当初、宴席などでの連歌興行に際して、句の類似性を防ぐためだったと思われる。

宴会の余興で既出と同じ趣向の句が出ては、座は白けてしまう。また相互の人間関係も損なわれるであろう。

現代のカラオケパーティで、既に誰かが歌ったのと同じ歌を歌うのと同じである。連歌が文芸性を高めるにしたがい、転じは文芸評価の一つとして組み込まれ、俳諧の世界でさらに磨か

れた。変化に乏しい平安から鎌倉、室町の時代の生活相、そして平安の美意識をもってそれらを眺めることでの単調性・視野の狭小性。その中で個々の句の独自性の発揮をどのようにして獲得するか。

そのために考えられたのがまず「体・用」であり、さらに「自他場」であろうか。

俳諧の時代になって、新しい美意識を開発しようとする努力、その対象となる事象を広げようとする努力によって、転じは大きく発展した。

相俟って進歩した「付け」の方法、「物付け」「心付け」「匂ひ付け」。

この二つ、「付け」と「転じ」の進歩・進化が、俳諧連歌の発展を大きく進めたと思われる。

●「自他場」はどう伝えられてきたか 1

まずは、猫蓑会創始者東明雅先生の論説を見よう。

㈠『夏の日』

いわずと知れた明雅先生の最初の連句入門書。作品は信州大学連句会でのものが主である。自他場についての説明はこの中の「連句鑑賞の手引き」という章の(三)三句目の転じのおもしろさ、に述べられている。

内容としては、多数の句の例示により、打越の句は人情を変えること、三句続いている句の真ん中の句を見立て替えすることで三句絡みを防ぐこと、またこの手法が立花北枝の『附方八方自他伝』によるもの、ということが述べられている。

㈡『連句入門』

第四章「付けと転じ」の中の「転じ」の項に説明されている。ここでは芭蕉出座の連句作品の中から、転じの悪いものを抽出して、それらの一句一句の自他場を示して転じの悪さを立証している。

●「自他場」はどう伝えられてきたか 2

古来の解説の紹介。

㈠『附方八方自他伝』元禄五年（一六九二）刊　立花北枝著『山中問答』の最後の一節。

冒頭に「他見無用。不可換千金也」とあり、最後に「三年の工夫をもって芭蕉翁に見せ申し候の一法也。仮初に他見を許さず執心の人に相伝ふべき。多くは秘すべし」とある。

内容は、三句の渡りの事例の論評で、初句の自他場に対して、続けての二句でどのように自他場を振り分けて付け進めるかを、十一の事例をもって説明。自他場とは何かの説明はなく、この時点で早くも、一句ずつに自他場の判定をすることは既知のこととして扱われている。

【事例】

硯に向ひ簾揚げつつ　　自
梨の花咲揃ふたる夕小雨　　場
雉子に驚く女一むれ　　他

かやうに中の句人情無き時は、自他をふり分けて句作すべしいかやうに転じても中の句を両方にて見るべし。

㈡『附合てびき蔓』天明六年（一七八六）刊

高井几董（一七四一～一七八九）著。

一巻の付け方を発句から順に通説を紹介し、さらに私説（自解）を述べる。その後に、発句以降の付けを順に例示し、前述の通説自解により分類解釈している。

事例は七部集および、蕪村・几董の両吟作品（ももすもも）が使用されている。

自他場については「古来八体之名目」の項の私説として紹介。以下一部を引用。

「前に自他・体用・人情・景気のわかちをもて、発句より第四・第五に及ぶ名目とす。一巻の連綿、四五句の運び、この法をもてよくしるべき処也。」

また、人情句で場の句（景気の句）を挟んだり、場の句で人情句を挟んだりするはよろしからず、人情二句景気二句と縞筋を織るかに一巻を続けると穏やかではあるが巻中に曲節がなくなる、つまり単調になる。

㈢『俳諧寂栞』文化九年（一八一二）刊　加舎白雄春秋庵一世（一七三八～一七九一）著。

刊行以前にも写本として流通。著者が弟子に書き与えたものが原本。東明雅先生推奨の俳論。上中下三巻。

ここまで時代が下ると、もはや自他場はとく

に秘伝ではなく、一つの常識として解説されている。

中巻には「連句自他の事」という項目があり、多数の事例が引用されている。その所説は概略左の通り。

連句では一句毎に自・他をはっきりさせなければならない。また三句の転じがなされているかどうか十分に気を配る必要がある。人情句が続いた時（二句以上）には其の場、其の場のアシライ、時節、時分、天象などを付けるとよい。「其の場のアシライ」とは其の場にいかにもありそうな道具類などを表現した句をいう。

場の句は三句続けるのはよくない。人情句を場の句で挟むこともよくない。この付け方では三句の転じはできない。自他のはっきりしない句は次の付け句でこれを定める。例えば

朝まだき狩弓狩矢持そへて
うしろ姿もはたちうち外

こうすれば前句も他の句となる。また、

朝まだき狩弓狩矢持そへて
つめたかりけるかち渡り川

と付ければ二句とも自の句になる。

下巻では一句の自他場は統一されねばならない、と説いている。

【事例】

あら海に海人の飛びこむ寒さ哉

「海人の飛びこむ」は他なり。「寒さかな」は自なり。一句の自他あはず。

あら海に海人を見る日の寒さ哉

かくなくてはつづかず。一句の内自他あり。尤句尤句分別すべし。

●自他場の本質は何か？

以上、諸説はそれ自体として納得できるところが多いけれども、自他場の本質については述べられていない。一句毎の、また打越句の自他場を変えることで転じるのは当然、という前提である。

●自他場の本質はいったい何なのであろうか

a　私はお汁粉を食べました。
b　弟はお汁粉を食べました。
c　私たちはお汁粉を食べました。
d　お膳に出ているのはお汁粉です。

右は同じような内容の現象を自他場を換えて文としたもの。

ここには「お汁粉を食べる」という現象がそれぞれ別の視点から述べられている。それぞれの描く処はあまり変わらないが、それにどのように反応して次を述べて行くかを考えれば、それぞれが異なる反応を引き起こすことが自然の成り行きである。

つまり視点を変えることで新しい世界に入ることができる。これが自他場による転じの基本構造である。

というより、転じ・変化の可能性を基礎のレベルで高める、というのが自他場の本質である。

この基礎にそれぞれ全く異なる事象内容を載せることで大きくかつ本格的な転じをなすことができる。

翻って、右の「お汁粉」の例に見るように、自他場だけではとても「転じ」などということはできない。

また異なる事象を表現したとしても、これが自・他・自他半・場のうちの同一形式、同一視点から述べられていては、同一人物のモノローグあるいは単純な描写の連続にしかならない。自他場を換えることで、視点を換えることになって、単なる事実描写の羅列から脱することができる。事実の羅列から動きが出て来る。

いわゆる「根を切る」ことの可能性をさらに高めることができる。

【例証】

私はお汁粉を食べました。
私は会社へ行きました。
私は映画を観ました。→妹は映画を観に行きました。
さらに
私はお汁粉を食べました。
町には小雪が降っています。
私は映画を観ました。→妹は映画を観に行きました。

または1
私はお汁粉を食べました。
私たちは仲良しです。
私は映画を観ました。↓妹は映画を観に行きました。
または2
私はお汁粉を食べました。
彼は新聞を読んでいます。
私は映画を観ました。↓妹は映画を観に行きました。
根が切れていないとはどのようなことか、三番目のフレーズを↓以下に換えた場合と比較すれば、右の例証でよくわかるのではないか。
以上、ささやかながら自他場の本質性について考えてみた。諸兄姉先輩の批評を得られてさらに認識を深めることができれば幸いである。

鉋の跡

若林文伸

――連句一巻を巻き上げたら捌きが校合する。芭蕉も「やまなかしう」の翁直し「馬かりて」の一巻にその実体を示している。――

これは平成十四年十月十五日発行の『猫蓑通信』四十九号に発表された、明雅先生の文章の冒頭である。

そこで、「馬かりて」の巻三十六句と「曾良餞翁直しの一巻」と前書された北枝の草稿を併せて読んでみたのだった。その中で、例えば、

ウ二　役者四五人田舎わたらひ　　曾良
は
　遊女四五人田舎わたらひ

と直され、

ウ三　こしはりに恋しき君が名もありて　翁
は
　落書に恋しき君が名も有て

と直されている。

直されたのは三十六句中十五句であるが、原句のまま治定された句にも芭蕉のコメントが付されている部分があって、照合しながら鑑賞しているうちに、自分が元禄二年の庭の傍に座って見学している気分にさえなってきた。

ところで、明雅先生の校合はどうであろう。同座したり、文音の相手をされた方々はその折々に先生の挙措に触れ、先生の言葉や一直された句の筆跡にも触れ得たのだったが、そういえば、以前、先生とこんな会話があった。

B「先生の数字の句はおもしろいですねえ」

M「いやあ、僕は、人からそんなこと言われたの初めてだよ」

『夏の日』以来説かれた連句の面白さのひとつ「一句一句の面白さ」を探ってみようと思い立ち、先生のお句を拾い始めた頃の話である。

百年の花に明治も遠くなし
（昭和四十一年）
二号室に住んでいる女二号とか
（昭和四十五年）
五十年旅路の果の旅役者
（昭和四十六年）

付句を拾い出すことに集中したが、当然のこととして付合いも目に入り、興味を引かれれば作品全体を書き写して鑑賞することにもつながって行った。

『季刊連句』は、『猫蓑通信』に度々再録されてご存知の方々も多いが、創刊号（昭和五十八年六月）から終刊の第四十五号（平成六年六月）の全巻を手にすれば、芦丈先生の連句誌『山襖』を先生が形容した言葉そのままに「ずしりと重い」のであった。十一年間の連句活動と作品群がぎっしり詰まっているのである。その『季刊連句』発刊のさなか、平成三年二月に上梓されたのが『新炭俵』である。こうして『季刊連句』と『新炭俵』は密接な関係にあることを私はやっと知ったのであったが、今回、先生の校合の跡

を知ることのできる二巻を紹介してみたい。いずれも『新炭俵』上巻からの転載である。

二十韻　春ヶ月　　膝送り

春月や木の間は余呉の水明り　蓼艸
帰りし鴨に睡る鳰鳥　時彦
蕨餅落着きの茶をすすめぬて　明雅
歩みそめたる当歳の子よ　艸
ウ
日本語の通じぬ国は嫌ひなり　彦
炬燵の中で直す時差ボケ　雅
深雪晴れ槍投げの槍突きささる　艸
若き男の背筋まっすぐ　彦
尼となり果てても甘き恋の味　雅
鍵穴にただ蛇の衣ゆれ　艸
ナオ
植木屋の日当騰るばかりにて　彦
赤門前の餃子チューハイ　雅
彼岸花咲き躁病の文が来る　艸
せつせつと吹く秋風の中　彦
月登る単身赴任の我と猫　雅
ゆらりと胸の深海魚ゆれ　艸
ナウ
擁かむとベッドカバーをはぎ取りて　彦
玻璃戸のあなた皆菜種梅雨　艸
きしみゆく柩車に花の散りかかり　彦
老人一人田の畦を塗る　雅

昭和六十年四月二十八日　於　俳句文学館

この二十韻一巻「春ヶ月」は昭和六十年六月発行の『季刊連句』第九号で発表されている。作品を巻く様子が、連衆の会話体のまま併載されていて、当日治定される過程まで読み取ることができる。難しい語はほとんどなく、五年後に発刊された『新炭俵』上巻の巻頭に置かれた。それは、あとがきに述べられたように、軽みを発揮した『炭俵』の「芭蕉の境地に迫るべく十分に努力した」作品の筆頭と言えるだろうと思う。それは左に示す一直がなされ、校合にさらに磨きをかけられている事実からもうかがえるのである。（先が『季刊連句』、次が『新炭俵』）

脇

帰りし鴨に睡るにおどり　時彦
帰りし鴨に睡る鳰鳥

「鳰鳥」と、韻字止めに直されている。

第三

蕨餅まづ落付きの茶を飲みて　明雅
蕨餅落着きの茶をすすめぬて

後の打越、ウ折立との関連で、人情を自から自他半へ直され、蕨餅にルビをふり、「落付き」を「落着き」と直されている。

ナオ二

赤提灯の夜々のチューハイ　明雅
赤門前の餃子チューハイ

提灯と夜を消され、餃子には片仮名でルビをふられた。

以上が、提唱して間もない二十韻での三ヶ所の直しの跡であった。もう一つの巻、『新炭俵』上巻唯一の歌仙「風の二月」では八ヶ所に直しがある。この歌仙、実は『季刊連句』創刊号に掲載され、秋元正江さんコメントもついている。『猫蓑通信』の三号前、第百号に転載されているから、記憶に新しい方も多いかもしれない。

歌仙「風の二月」　明雅捌

よく晴れて風の氷の二月かな　照敏
林深きに咲きし金縷梅　時彦
ふらここに子等の群がり遊ぶらん　正江
畳の縁に拾ふ糸屑　孝子
長話ひとりできかす十三夜　徒司
蝼蛄の鳴く道ともに行きつつ　明雅
ウ
冷まじく砂漠の果に砂漠あり　彦
眉にかなしみ頬にほほゑみ　敏
きぬぎぬのひとを抱けば軽きこと　孝
この二三日日記空白　司
寒土用高層ビルのあらはなり　江
月の枯野に遊ぶ鍵つ子　司
クレーの絵「彩は私の音符です」　江
鴉よ集へ死神が来る　彦
日雇ひのぐびぐび呷るコップ酒　孝
丸き座蒲団伊予の絣で　江
島山は花の上漕ぐ波の音　敏
僧の下げ来し春の筍　孝
ナオ
捨蚕揺らしはやてのつのりけり　敏
胃痛しばしば偏頭痛さへ　江
子のために家も屋敷も手ばなして　孝
噂の好きな角の煙草屋　仝
喪の服を脱ぎてダンスに明けくるる　江

人妻となり昼顔となり　敏
キーチェーンはづしてバスに湯をみたす　彦
ひた走りくる産地直送　孝
影もちて黒猫よぎる切通し　江
梢かくれに月代の雲　敏
外厠まるめたる背のやや寒く　司
零余子飯炊く婆を死なせて　敏
ナウ秋の川橋をくぐりて行くばかり　仝
空に漂ふ衛星の灰　司
ひもすがら漠となりたる木曜日　江
眠気を払ふ熱きおしぼり　仝
花の雨明治大正幻に　雅
尾をつけしまま歩き出す蝌蚪　司

昭和五十八年二月二十日　於　俳句文学館

一直された箇所は左記の通りである。
ウ二　ほほえみ→ほほゑみ　と直されている。
ウ五
寒夕焼高層ビルのあらはなり　江
寒土用高層ビルのあらはなり
と、「寒夕焼」を「寒土用」に直された。
ウ七
クレーの絵「彩は私の音譜です」
クレーの絵「彩は私の音符です」
と直され、「彩」のルビもはずされている。
ウ九
日雇ひの暮るれば呷るコップ酒　孝
日雇ひのぐびぐび呷るコップ酒
と直されている。

ナオ一
「疾風」を「はやて」と直されている。
ナオ七
キーチェーンはづしてバスに湯を入るる　彦
キーチェーンはづしてバスに湯をみたす
と直されている。
ナオ折端
蕎麦こねてをり婆を死なせて　敏
零余子飯炊く婆を死なせて
と直されている。
ナウ四
額を拭ふ熱きおしぼり　江
眠気を払ふ熱きおしぼり
と直されている。

この他『新炭俵』では、ルビについても検討された跡があり、はずされたものは「彩」のほか「外厠」「幻」であり、逆に、新たにルビをふられたものは「絣」「漠」「蝌蚪」の三つである。

さらに言えば『新炭俵』全巻は『夏の日』と同様に長句、短句の句末の位置を揃え、懐紙式の伝統に倣っているのである（例外もある）。

以上、二作品初出の『季刊連句』の各号と『新炭俵』掲載の決定稿を比較して先生直しの跡を追ってみたのだが、何故直されたのか、理由を考えているうちに、明雅先生から「あのね～」とまたメッセージが届きそうな春の宵である。

温故知新

17：指導者の大切さ

●先達はあらまほしきことなり

兼好『徒然草』元徳二年（一三三〇）頃

第五十二段　仁和寺にある法師

仁和寺（にんなじ）にある法師、年よるまで石清水（いはしみづ）を拝まざりければ、心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとり徒歩よりまうでけり。極楽寺・高良（かうら）などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつることはたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意（ほい）なれと思ひて、山までは見ず」とぞ言ひける。

少しの事にも先達（せんだち）はあらまほしきことなり。

・現代語訳

仁和寺にいたある法師、年をとるまで石清水八幡宮に参詣したことがないのを残念に思い、あるとき思い立って、ただ一人で歩いてお参りした。極楽寺・高良大明神などを拝み、これで全部お参りしたと納得して帰った。さて、帰ってから朋輩に向かって、「長年のあいだ念願し

ていたことを果たすことができました。かねて聞いていた以上に（石清水八幡宮は）尊いところでしたよ。それにしても、参詣する人がみな山に登って行ったのは、いったいどういうわけだったのでしょう。気にはなりましたが、八幡神にお参りすることが本来の目的だからと思って、山の上までは登りませんでした」と言ったそうです。

ちょっとしたことでも、先達というのはいてほしいものですね。

●よい師を見つけること

東明雅『連句・俳句季語辞典十七季』平成十三年（二〇〇一）

序文「連句の楽しみ――連句の習い方・教え方」

連句を初めて習う場合、最も大切なことは良い師を見つけることである。

（中略）この場合、良い師とは、連句の実作が上手なだけでなく、教え方のうまい人であることが望ましい。そのような人は、全く初心の者を教え、捌く場合、最初からぎしぎし式目を教えこんでせっかくの興味を失わせるようなことはせず、知らず知らずの間に、すべてを教え込む術を心得ているのである。

（中略）三章に記した「連句概説」は、これは初心の人が良い師について次第に連句に精通し、いよいよ自分が捌きになった時、心得ていなければならぬルールをまとめたものである。初心の人がまずこれを読んで連句の道に入ろうとすれば、きまって消化不良をおこし、連句がいやになるに違いない。「連句概説」は決して連句入門書としてではなく、いわば連句再確認のために用いていただきたいものである。

解題●兼好法師は、中世を代表する歌人の一人だが、代表作『徒然草』は、歌論というよりも、幅広くさまざまな題材をカバーし、人間観、人生観、社会観など、現代なら「思想家」と呼ばれるような考察を多方面にわたって開陳している。しかも、それらが決して単なる抽象論ではなく、物事や人についてのきわめて活き活きした関心、観察、描写に支えられている。一流歌人の面目躍如だ。現在に至るまで、古典文学の中でも高い人気を維持していることの大きな要因だろう。この段に登場する「仁和寺にある法師」も、いかにも「あるある」な人物として、その失敗がコミカルに描き出されている。コミカルではあるが決して冷たい視線ではなく、むしろ暖かい同情とともに描き出されているように思われる。

それはともかく、やはり独り合点はいけない。この法師は、せっかく一念発起して石清水八幡宮までかけて行ったのに、本体に付属する極楽寺と高良明神の社を八幡宮の本体と思い込み、その先の山上にある肝心の八幡宮には詣でずに帰ってきてしまった。「少しの事にも先達はあらまほしきことなり」という締めの言葉が切れ味よく決まっている。

『徒然草』は歌論書ではないが、何よりも歌に注力した兼好の作だけに、何かにこと寄せての歌論とも読めるような記述を多く含んでいる。この段もその一つだ。自分は未踏の境地と思えるところに至った、と主観的に思ったとしても、本当の先達の目から見たら、それはほんの入口に立ったにすぎないのかもしれない。謙虚に先達を求め、先達から学ぶ姿勢を忘れてはならない。

現代の東明雅師がお書きになった『十七季』の序文は、兼好の締めの言葉と真っ直ぐ対応するように明快な、「連句を初めて習う場合、最も大切なことは良い師を見つけることである」という言葉からはじまっている。良い師すなわち良い先達だ。

明雅先生は、初心者に対する忠告、警告だけでなく、先達のあるべき姿も併せて述べておられる。いわば、初心者と指導者双方の理想的な姿を描写することで、そのどちらにとってもわかりやすいように両者の関係を説いておられる。

しかし現実には、なかなかこうはいかない。先達の持つ経験、知識をまだ持たない初心者は、当然、先達が考えることをうまく理解できないし、早く知識を身につけようと急ぎ、そのことによって連句を実際以上に難しいもののように捉えて、ありもしない迷路に踏み迷うようなことが起こりがちだ。

先達は先達で、自分が初心者だった頃のことを忘れ、初心者が感じること、考えがちなことについての洞察を失いがちだ。すると知識や式目の「押しつけ」に陥る。先達もまた、初心者に向かう謙虚な姿勢を忘れてはいけないだろう。初心者に接することは、ベテランがリフレッシュし自己点検する、よい学びの機会でもある。「俳諧は三尺の童にさせよ」という芭蕉の言葉にはそういう含みもありそうだ。

実は『十七季』を持っている人でも、この大切な序文を飛ばしてしまい、読んでいない人が案外多いように思える。初心者も、指導的な立場に立ったベテランも、繰り返し味読すべきかと思う。（斎）

事務局だより

●第百三十六回例会（平成二十八年初懐紙）が開催されました

一月十六日（土曜日）、原宿南国酒家迎賓館にて、本年の初懐紙が開催されました（前号既報）。

正午に開会し、まず、昨年十一月に亡くなられた桃径庵二世式田恭子宗匠へ黙祷が捧げられました。この会は、生前の恭子宗匠が事務局長として会場設定された最後の会になりました。

会長挨拶に続き、八卓に分かれて歌仙を興行し、代表披講ののち、午後四時三十分に閉会しました。

初めての、中華料理をいただきながらの例会

当日の歌仙八巻は、今号のｐ２～ｐ５に掲載されています。

●第百三十七回例会（亀戸天神社藤祭興行）が開催されました

四月二十一日（木曜日）、亀戸天神社にて、第百三十七回例会（亀戸天神社藤祭興行）が開催されました。正午より、神楽殿にて奉納正式俳諧を興行、そのあと午後一時より、八卓に分かれて二十韻を興行しました（作品、詳報は次号）。

●今後の予定

・第二十六回猫蓑同人会総会・歌仙実作会
六月十九日（日曜日）
十一時～十七時（受付十時半より）
於　新宿ワシントンホテル新館

・第百三十八回例会
平成二十八年度総会・歌仙実作会
七月二十八日（木曜日）
十一時～十七時（受付十時半より）
於　江東区芭蕉記念館

・第百三十九回例会
芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌脇起源心実作
十月十九日（水曜日）
於　江東区芭蕉記念館

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・井ヶ田杞夏様　平成二十八年一月　一万円

基金口座　みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金　普通預金　３３７６０４５

●新会員

・竹中　塁　二十八年三月入会
・式田香里　二十八年三月入会

●国民文化祭連句募吟にふるってご応募ください

・第三十一回国民文化祭あいち２０１６「連句の祭典」募吟
形式：歌仙
締切：平成二十八年五月十日（当日消印有効）
応募料：一巻につき二千円

「連句の祭典」は、今年十月二十九日（土曜日）から三十日（日曜日）にかけて、熱田神宮文化殿にて開催され、吟行会、交流会、募吟受賞作品表彰式、連句実作会が行われます。大会当日にもふるってご参加下さい。なお、募吟応募は大会当日参加のための必須条件ではありません。

●訂正

・前号（第百二号）ｐ９「俳諧の一週間」五行目「八月」を「七月」に訂正。

季刊　『猫蓑通信』第百三号
平成二十八年四月三十日発行
猫蓑会刊
発行人　青木秀樹
〒１８２・０００３
東京都調布市若葉町２・２１・１６
編集人　鈴木了斎
印刷所　印刷クリエート株式会社